

# 「一生勉強」の言葉を胸に



早稲田大学准教授の高橋百合子さん

高橋百合子さん(47、1989年卒)が研究するのは、ラテンアメリカの政治だ。今、先進国が直面する格差や貧困などの問題に、数百年に渡り苦悩してきた蓄積がある分、「斬新な政策が生まれている。イノベーションの先端地域」という。

中高時代に熱中したのは音楽。ヘビメタルバンドをコピーし、ドラムをたたいた。文化祭では、切り裂いたTシャツ姿で髪を逆立てたが「先生も応援してくれた。温かく見守ってもらいました」。民族音楽にも関心があり、中2でポルトガル語に挑戦したことも。早稲田大学に進み、出稼ぎの日系ペルー人にポランテ

早稲田大学准教授の高橋百合子さん(47、1989年卒)が研究するのは、ラテンアメリカの政治だ。今、先進国が直面する格差や貧困などの問題に、数百年に渡り苦悩してきた蓄積がある分、「斬新な政策が生まれている。イノベーションの先端地域」という。

高橋百合子さん。年に2回はメキシコなどへ足を運ぶ。イアで日本語を教えながらスペイン語を学んだ。メキシコ留学や在メキシコ日本大使館勤務を経て、研究の道を志す。東京大学に修士入学し、東大大学院や米コーネル大学院で学んだ。

米留学で心に刻まれたのは「罪はしつこくたたかないと開かない」との思い。指導教員を見つめるのも自分で動かないと始まらない。「断られるのは当たり前。その後の本気度が試されています」。中高生が進路を考える際、「状況が許すなら、リスクをとって挑戦して」と勧める。人より遅い研究生活スタートや、その後が保証されているわけではない米留学……。リスクをとってきた経験からのアドバイスだ。

「受験指導のイメージが強いですが、教養主義の学校でした」と、中高時代を振り返るのは、帝京大学准教授の浦野慶子さん(38、97年卒)だ。

視聴覚行事では劇場でミュージカルを見たり、選択授業の芸術でドイツの哲学者カントの文献を読んだり……。思い出すのが音楽の授業。弦楽器に触れたのをきっかけにバイオリンを習い始めた。高校卒業直前に音楽の先生に言われた「一生勉強しなさい」の言葉を胸に、慶応大学へ進んだ。

専攻は社会学。医療や環境など複合的な「まちづくり」に関心を持つようになった。東大大学院を経て、米ハワイ大学院へ留学。今は帝京大で「都市社会学」を講義する。都心に集中する訪日外国人を、いかに多摩地域(都内の23区と島しょ部以外の地域)に呼びこむか、魅力発信を考える。

指導する学生から教えられたことは、自分でも試すようにしているそうだ。全国大学ラグビー選手権で2009年以来8連覇を誇るラグビー部の学生から毎日の振り返りをノートに書くように勧められ、すぐに同じノートを買った。示したいのは「学び続ける姿勢」だ。研究室に学生を呼ぶ時は世界的なピアニスト、内田光子さんが弾くモーツァルトを流す。「あの内田さんもお遇の時代があった。ひたむきに頑張ることを伝えたい」



執筆に携わった本を持つ浦野慶子さん

「社会学は地域に貢献できる学問です」